

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 話題提供1 「フィールドワーク」を通しての実践力育成

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 請川, 滋大 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00001298">https://doi.org/10.57529/00001298</a>

話題提供①

# 「フィールドワーク」を通しての実践力育成

日本女子大学家政学部准教授 請川 滋大

## 日本女子大学「児童学科」の特色

日本女子大学の請川と申します。宜しくお願い致します。

幼稚園の免許に関して言うと、私は、目白にある日本女子大学家政学部児童学科という所におります。もう一つ、生田にキャンパスがありまして、そちらは教育学科の方で、同じく幼稚園の免許を出しているのですが、今回は、目白の児童学科の方のキャリアラムについて、少しお話をします。「フィールドワーク」を中心にしながら四年間のキャリアラムを組んでいて、その中で学生の資質向上ということを考えております。

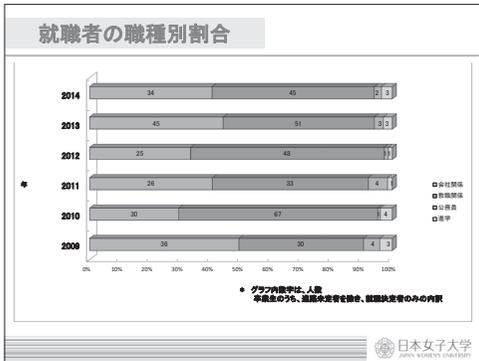
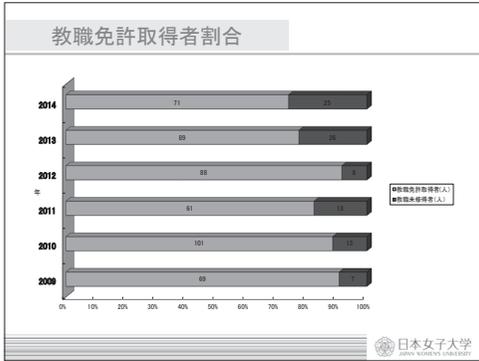


大学の経緯をお話しして、どういう特徴のある学校なのかということ、をまず知っていただきたいほうがいいと思います。簡単に御説明しますと、成瀬仁蔵という人が一九〇一年に日本女子大

学(当時は「日本女子大学校」)を創ったのですが、成瀬先生はもう全然お金のない人で、お金を出してくれる人をすごく募っていたそうです。それで今、朝の連続ドラマ(NHK連続テレビ小説)でやっている「あさが来た」の主人公である広岡浅子さんが賛同してくれて、お金をいっぱい出してくれたのです。これから多分、その話がドラマでも出てくると思うのですが。

その一九〇一年当時から、女子学生が高等教育を受ける機関がないということで、「家政教育」という、家庭に入って奥さんになるための教育をするのではなくて、人としての教育をしたいのだというのが日本女子大学の当初の理念なのです。そのため、開学当初から「家政学部」があったのですが、どちらかというと、実践もやるが実験・理論をしっかりとやるという学校の経緯がありまして、それがずっと戦後まで来ています。

もともと「育児科」という名称だったのですが、戦後、「児童学科」になりました。一九四八年なのですが、「児童学科」という名称で名乗ったのは、私も知らなかったのですが日本女子大学が最も古いそうです。それもあって、日本女子大学はすごく「児童学科」という学科名にこだわりがあります。保育者養成している学校でも、私も今、職場は三つ目ですが、「初等



「教育学科」であるとか「保育学科」であるとか、「子ども学科」とか色々あると思うのですが、「児童学科」ということでやってきていますので、保育者養成だけに力を入れてやるのがなかなかしにくい。私、幼児教育が専門なので、実践教育に力を入れていきたいのですが、その古くからの歴史のことをずっと知っていらっしやる方々は、ここは保育者養成だけではないのです、という感じが強いので、その理論から実践力をつけてゆく教育へと、こういうふうにしフトしていくかというところが、我々は課題としてすごく持っているところがあります。

免許は幼稚園と小学校が中心で、あとは中高の家庭科。保育士は出しておりません。メインは幼小というふうになっていきます。これも私たちの学校の特色かと思うのですが、免許を取る人が最近が増えてきてまして、「教員免許取得者割合」のグラフを見ていただくと分かると思うのですが、八割から九割ぐらい

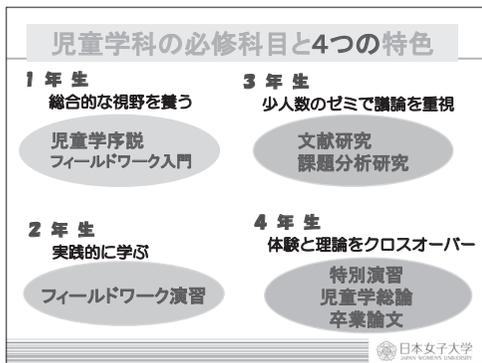
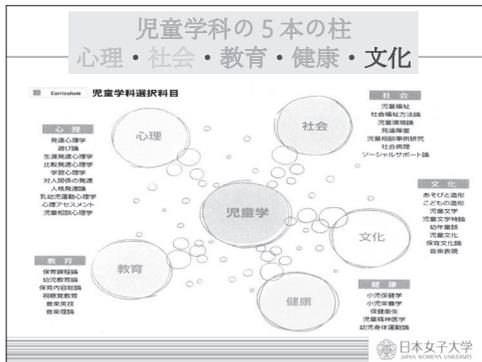
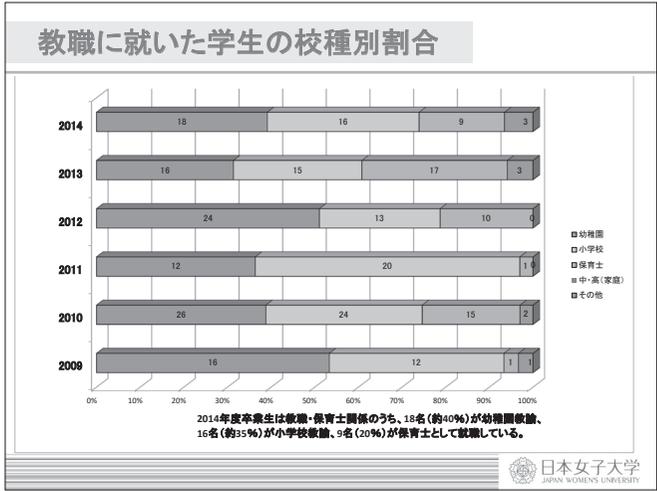
の学生が何らかの免許を取ります。一番多いのは、幼稚園と小学校を組み合わせて取る。次は幼稚園だけの人です。中高の家庭科を取る人は、本当に毎年数名しかおりません。こういうふうには免許が取れる学科なのですが、こちらのグラフで言うと、右側の濃い色の所が免許を取らないという学生なのです。現在二割ぐらい、二〇パーセントぐらい取らない。これでも取る人が多くなった方で、それこそ民間企業の就職がいいときには、こんなにたくさん免許を取っていないかったです。ですから、先ほどの話とも繋がるのですが、カリキュラムとして幼稚園免許に重点的に時間を割くということが、なかなかしにくい。民間企業に就職する人も多いではないかとか、免許取らない人もいるだろうということが、学科の中でもいつも議論になります。

就職先なのですが、「就職者の職種別割合」のグラフの左側が民間企業です。いわゆる会社関係です。左側から二番目が教職関係。幼稚園、小学校。保育士も自分で試験受けて取る子たちがいますので、最近バラバラと増えてきています。その他、右側の小さいのは公務員・大学院などです。こう見ますと、私は日本女子大学に来て十一年目ですが、就職先も最近幼稚園、小学校の就職が社会の状況もあって増えてはいるのですが、民間企業も半分近く行く。多いときは六割ぐらいが民間企業の就職という学校ですので、教育実習先に行っても「現場出る人、少ないですよ」というふうには、よくお叱りを受ける学校なのです。そういった学校、学科の状況、あと歴史的な状況がある中で、保育者養成・教員養成のところで、どうやって力を注いで行くのかということが課題かと私は思っています。

これはどういう校種に付いたかというグラフですが、左か

ら幼稚園・小学校・保育士です。小学校の採用が、いい時期と難しい時期とありますので、ここは変わります。大体、幼稚園・小学校が多い時期、幼稚園が多い時期などありますが、こういうような割合で就職しているというところです。

児童学科で学ぶことが、教員養成ということですが、もちろん「教育」というところが柱になるのですが、この心理・社会・教育・健康・文化という五つの柱ということに常に私たちは言っていますので、どれか一つにだけ重点を置くのではなくて、どれも学生が学びたいものを取れるように、しっかりと学べるようにしていく。それが、私がか来たときも驚きましたが、もともとはやっぱり座学中心なのです。理論・座学が中心なものですから、実践的な力をつけるというものが非常に少ない学校でした。それを少しずつ今、変えて来ているというところの話を、今日させていただきたいと思っています。



「フィールドワーク」の導入

國學院大學の状況とどれぐらい違うのか分かりませんが、私たちの所では、免許を取るためにどうしても取らなければいけない科目というものは、これは國學院でも同じだと思うのですが、それはもう免許必修としてあります。しかし、学科の必修は日本女子大学の児童学科はとも少なくしています。ここに書いてあるものしかありません。一年生で言うと、前期に「児童学序説」、後期に「フィールドワーク入門」、二年生になりまして「フィールドワーク演習」というものを前期と後期。三年生からゼミが始まります。「文献研究」、「課題分析研究」、「特別演習」、ここら辺がゼミで、最後四年生の後期、ゼミも続いています。が、「児童学総論」というものがあって、「卒業論文」を提出する。

これだけが必修です。ですから逆に言うと、免許を取らない学生であれば、これを取っていれば、あとは自分で組み合わせさせて取れる。先ほどから申しておりますように、「児童学科」です。から、いわゆる児童文学であるとか児童文化とか、子どもの保健福祉とか、そういうものも科目として用意してありますので、教員養成なり保育士という資格だけに拘らず勉強している人たちもいます。八割ぐらいの学生は、免許は何かしら取りますが、全く教育に関わらないで卒業するという子は殆どいないのですが、選択の余地は大きいということです。

今日お話ししたのは、この「フィールドワーク入門」から始まって「フィールドワーク演習」、そしてこれは必修科目に入っていないのですが、「教育ボランティア」というものを数年前から入れましたので、その流れから、どういうふう卒業論文、就職という形になっていくかという話をさせていただきますと思います。

もともと、私も今回、歴史を改めて調べてみましたが、今から考えると二十年前ぐらい前にカリキュラム改編をしています。一九九五年までのカリキュラムでは、ものすごく理論中心で座学中心の学問だったわけです。例えば「児童文化」という科目を領域の「環境」に当てていました。あと「児童文学」という科目は教職の国語に当てていた。これも先ほど申しましたように、教員養成を中心にやるのであれば、こういう科目はもちろん教職科目にガッチリと変更していかなくてはいけないのですが、私たちは「児童学」がベースで、免許はオプションとして取れるのだという、昔ながらの学校の考え方で教職課程を考えていたものですから、教員養成の力を育成するというふうなカ

リキュラムにはなっていないませんでした。

一九九六年以降、私はまだ来ていない頃ですが、この頃から教員養成だけに限らず、子どもの問題を考える場合に、やはり座学だけでは子どもの問題との解決出来ないし、問題を同定することは難しいであろう。その子どもの生活の場に、我々や学生自身が身を投じながら、そこで問題を見つけて解決する力を養っていかうというふうになって、先ほど申しました「フィールドワーク入門」とか「フィールドワーク演習」というのを導入することになりました。今と少し形が違いますが、学生を外に出すということが出てきたのはこの時代です。

現在、ベテランの幼稚園教諭として働いている先生方に、日本女子大学の当時の話を聞きますと、「もう当時は、学生時代に手遊びの一つも教えてもらえなかった。グー・チョキ・パーとかというのも全然知らなくて就職したのですよ」というふうに仰っていました。これは今でも、まだその名残はありまして、色々実践的なことも我々は教えるようになりましたが、そこよりやはり、子どもの理解とか子どもの様子を見ようというところを、このフィールドワークでも力を入れてやろうとしているところですよ。

### 「フィールドワーク入門」

では、「フィールドワーク入門」というのは、どういうものか、これを御説明いたします。一年生の後期に設定されている科目です。必修ですので全員取らなくてはなりません。先ほどチラッとお見せしましたが、「児童学序説」というものがありま



し方ということについて、どういうことを子どもたちでやっているだろうか。それをKJ法で整理しながら、まとめていくということを行いました。あと、先ほど申しました全体会というのがありますので、KJ法で整理した内容を全体会で報告しながら、私たちがこういうこと調べました、こういう課題があると考えました、ということを発表してもらおうということを行っています。これが一年生の後期の必修科目です。

### 「フィールドワーク演習」

二年生になりますと、前期と後期で「フィールドワーク演習」の1と2というのがあります。これは、より外に出て行く機会が多くなります。「入門」では基本的なハウツーを学びましたので、今度は実際に現場に出ていくということです。これもゼミごとによりますが、こちらは人数がもうちょっと少なくなります。七人の教員で担当していますので、大体一人の教員につき学生は十五人ほどです。十五人ですと身動きがもう少し取り易くなりますので、例えば私のグループであれば、認定子ども園に連れて行ったり、放課後子供教室とか学童に連れて行ったりということができません。

そのときも、また記録を書いたり、そこから問題をどう立ち上げるかということをやっているのですが、私は、「入門」と違って「演習」の場合は同じ所に二回連れて行くということをし意識しています。これは最近のやり方です。以前は、色々な所に何回か連れて行くということだったのですが、今は同じ場所に行って、前回見たときと今回見たときとどう違うかとい

う、その違いを考えてもらいたいなど。以前より、國學院大學の幼児教育専門学校では、一年間通して実習をやっていたということのを伺っていますが、そういった縦断的というか、時間を超えて関わって行くことで、子どもたちの変化、先生の関わりの変化を少し見てもらいたいなというふうに考えています。

フィールドワークの手法を用いて、自分たちでフィールドに出て行って記録を書くということはやるのですが、次に難しいのは、ではそれをどうやって卒業論文、研究につなげていくかということなんです。見て記録を書くことはできるのですが、ではそれがどうやって論文になるのかということが課題として出て来ますので、フィールドワークの手法を用いて書かれた論文を、私がいいなと思うものを、面白いものを幾つかピックアップします。学校にいるときは、それをこの十五人で読みます。いわゆるゼミです。ゼミのような形で論文読んで、幼稚園のフィールドワークをやると、こういう論文を書けるのだとか、公園でのフィールドワークで、こういう論文があるのだとかです。そういう例を幾つか知った上でフィールドに出ていくと、学生たちの視点もある程度、絞られてきて、なかなかいい視点が出てくるな、というふうに私などは考えています。出て行く場所は、こういう幼稚園、プレイパーク、学童保育などです。

これは今年なのですが、附属の豊明幼稚園というのが大学の横にあります。しかし、時間の設定が悪いのです。私たちのこのフィールドワークは三時間目なのです。私は、本当は幼稚園や保育所に連れて行きたいので、午前中がいいのです。午後の三時間目だと、移動している間に終わってしまうのです。帰りの会になっていたり、あと預かりの時間しか見られないという

ふうになってしまっているので、「ちよつと時間設定、変更してほしいな」と前から言っているのですが、学科だけの問題ではなくて、他学科の授業との絡みもあるもので、なかなか簡単に動かせない。出来るだけ近くの所で、お弁当の後に帰るまでの時間の子どもの様子、見られる所がないかなと考えたときに、附属幼稚園はすぐ隣ですから、そこが活用できればいいなというところで、以前は行っていなかったのですが、最近は少し附属幼稚園にお世話になっている。少しこの態勢、ずつとメモを持っているというのが、いいかどうか分かりませんが、こういうふう子どもたちの周りで少しメモをしたり、記録をとったりさせてもらっています。

あと、これは今年の秋に出来たばかりなのですが、附属豊明小学校に学童クラブができたのです。この九月からです。「学童」は、学校が終わってからの時間設定になりますので、三時間目四時間目などという時間でも、子どもたちが、いわゆる放課後の時間を過ごしていますので、フィールドとしては使い易いかなど。ここもこのあいだ少し行ってみました。これもまた今後、考えていかなくてはいけないのですが、日本女子大学の附属です。小学校は女の子しかいません。男の子は誰もいませんので、ちよつと一種独特な状況ではあるのです。だから、これが一般化できるかというところがあるので、フィールドワークの練習、トレーニングとしてはいいと思うのですが、一般化された研究のフィールドとしてはどうかなのというの、私は少し課題だというふうに思っております。これが「フィールドワーク演習」です。

先ほども言いましたように前期と後期ありまして、これは担

当教員が替わります。私は幼児教育が専門ですので、どちらかというと幼児がいる所、もしくは小学校の放課後です。学童の子がいる所に出掛けて行きますが、他の分野の先生方もいらっしゃると思いますので、その先生方はまた連れていくフィールドは少し異なる所です。二人の先生につくことによって、違った子どもがいる場所を見ることができるといのが、それも一つの特徴ではないかなというふうには考えております。

#### 「教育ボランティア」

次は三年生です。これは比較的、最近導入したものののですが、二〇一〇年頃に、学生たちは自分たちで自主的にボランティアに良く行くようになっていました。学校とか幼稚園です。案内が学校からも来るのですが、全く単位と関係なく空き時間を見つけて出掛けて行くというふうにしていました。そういう学生の方が、すごく努力家ですし、「単位関係なく私はボランティア行きます」と言うので本当はいいのですが、私たちがそういう学生たちの育ちを見てみると、これはある程度学生たちに単位として認めてあげて、学校としても少し背中を押してあげたほうがいいのではないかとこのように考えたのです。今までのところは必修でしたが、こちらを必修とすると、先ほど言いましたように、教職に就く人が半分ぐらいたしたら、半分は民間企業です。もう自分は民間企業に行こうと思ってい三年次に全員ボランティアに行かなくてはいけないとなると、果たしてそれはいい学びになるかというと、ちよつと疑問を感じるところもありました。嫌々行くという感じになると、

ボランティア先にもご迷惑をお掛けしますので、考えた末にこちらは選択授業にしました。

おおむね三十人です。殆どが将来教職に就きたいという学生で、単位は二単位しかもらえませんが、一年間そのフィールドに関わってボランティアさせてもらいながら勉強したいという学生ですので、三十という設定は丁度いいぐらいです。大きな問題もそれほど起こらず、私たちが御挨拶に行っても大体高評価をいただいております。

こちらの「教育ボランティア」は、もともと「フィールドワーク実習」という名前で二〇一〇年に入れたのですが、多くが殆ど教育関係の場所になりましたので、今は「教育ボランティア」という名称に変えました。こちらは三人の教員で担当しております。三十カ所というのではないですが、一園に二人行っている場合もありますので二十カ所ぐらいです。少なくとも一度以上は訪問して学生の様子を伺ったりということを行っています。

単位認定に最低六十時間というふうに設定をしております。六十と考えると、もし丸々一日行ければ一日で六時間ぐらい行けるのです。その保育時間プラスアルファのお手伝いがあるのですので、一日六時間行ったら、十日間行けば六十時間になってしまうので、春休みとか夏休みとかを使う学生であれば、もうあつという間に終わってしまう時間数ぐらいの設定なのです。が、学生たちには最初に、「六十時間終わったから、さようなら」ではなくて、「最低六十だけでも長い期間関わるようにして、実習とは違った経験してもらいたい」ということを言っています。教育実習は、すごく緊張した二週間、三週間で学生は過ごしてくるのです。もう自分が将来、幼稚園の先生に向い

ているだろうかということよりも、記録を書いたり、指導案立てたりということ、もうとにかく必死なのですが、このボランティアの場合は、少し引いた所で関わりながら子どもの様子をゆったりと見たり、あと先生たちの裏側の目に見えない仕事も感じながら関わる事が出来るので、実習よりも意外にこちらのボランティアに行った方が、学生たちは教員になりたいという気持ちを高めているような気がします。「一年間いなさい」とは言っていないませんが、多くの学生たちはほぼ一年です。「一年」と言っても十二月ぐらいまでということなのですが、一年ほど通っている学生が多いです。

教育ボランティアのボランティア先としては、小学校の免許を出しているの、小学校のティーチングアシスタント。あとは幼稚園です。夏休み、春休みなどは幼稚園・保育所で一日、長時間保育に対応するとかです。あと預かりの部分だけお手伝いするなどというふうに、色々な場所で活動をしています。

この「教育ボランティア」を始めてから、思ってもいなかったのですが、これは良かったなと思うのは、四年生になってからも継続して通う学生がいるということでした。こういうボランティアの報告会をやるのですが、その中で学生たちは、色々な課題を見つげながら、また園との関係もいい関係をつくりながら一年間を経験していきます。そうすると、丁度四年生になって今度卒論を書かなければいけないとなったときに、自分がずっと関わっているそのボランティア先をフィールドにして卒論を書けないかという学生が、以前よりも増えたのです。私なども、出来れば幼稚園の先生になりたい人なら幼稚園、小学校の先生になりたい人なら小学校でのフィールドワークを基にし

た卒業論文を書けば、先生としても力が付くのではないかなというふうに考えているので、学校での座学だけではないところでの学びを意識して、フィールド研究を特に推奨しています。

### 体験と理論のクロスオーバー

先ほどの学科紹介の所で、四年生の所に「体験と理論をクロスオーバー」というふうに書いていますが、学校で学んだ理論と実践現場での体験というのをクロスオーバーして、先生という仕事を、教職という仕事をより、学生としてではなくて一歩引いた所から見てもらえればな、というふうに考えています。卒論は、卒論発表会を各研究室で行っています。うちの卒論は枚数が多いのです。A4で六十枚ぐらい。おおむね六十枚になるのですが、原稿用紙で言うと百二十枚なので、それなりに確り書かなければいけないのですが、フィールドワークで一年間関わりながらやると、もうそれでも足りないぐらいに色々なデータを収集してきて、戻ってくるというか、卒論を書きます。

今、検討すべき課題として私が考えていることなのですが、先ほど申しましたように、教育学科と児童学科で出している免許がすごく近いのですが、設立百二十周年に向けて二〇二一年にキャンパス統合の話が出ていて、生田のキャンパスを自由に持つてくるという話があるのです。そうしたときに教育学科と児童学科は非常に似ているので、どう住み分けするかとなったときに、児童学科に保育士過程を導入しようという話が、今、検討中で進んでいます。そうしますと今、時間割とかの中のカリキュラムを考えているのですが、先生方は御存じのように、

とても忙しくなります。実習の回数が増えて、授業なんかでも事前に実習指導なんてことをしなくてはいけないので、今までやってきた、こういうフィールドワークとかボランティアの時間を、果たして確保、このままできるかどうかということが、少し課題だなというふうに思っています。四年生になると、もう授業が週に二回とかになって、ゆったりとボランティアにも行けるのですが、三年生のときはまだ授業が多くて、学生たちは一日空きがあるという日はなかなか取れないです。半日ということが多いです。そこを何とか、一日授業を空けられるようにして、この日は外、フィールドに出ていく日というふうに出来ないだろうかというふうに、私などは考えています。

それから、今日はお話ししていませんが、「教職実践演習」は、実際現場で働いている先生方をお招きして、そこで具体的な課題を投げ掛けてもらつてのアクティブ・ラーニング的な学びをしているのですが、自分たちが学んできた実践的な学びを整理・統合するような場として、この実践演習を使いながら、実際にはまだ先生にはなっていないが、フィールドでの学び、先生のお手伝いとしての学びというのを、どうやって整理・統合していくかというのが課題かと思っています。

以上で終わらせていただきます。ありがとうございました。